

あとがき

塩塚 秀一郎

中地義和先生退職記念特集号へのあとがきの任を授かったことは、私にとって身に余る光栄であるとともに、いささか荷が重いと感ぜずにはられない。長年苦楽をともにされた僚友が往時を懐かしみつつ功績を労うというのがこれまでの通例であったのに対し、私自身が中地先生の同僚であったことはないからである。いきおい、以下の拙文に描かれるのは、華々しい人脈を誇る世界的学者として研究の第一線を牽引する姿でも、東日本大震災の混乱時に研究科長として奮闘された姿でもなく、ただただ、不出来な一学生が仰ぎ見た教育者としてのお姿に限られることを、あらかじめご承知おきいただきたい。

中地先生は東京大学教養学部助手を経て、1988年に同学部助教授に就任されている。私が中地先生を初めてお見かけしたのは「フランス詩への誘い」と題されたオムニバスの入門講義においてだった。教養学部2年生の時だから1990年前期のことである。初回の授業には髭を蓄えた貫禄のある教授が登場し、教卓に乗り出した上半身を両腕で支えながら、講義の概要やフランス詩の特徴を重々しく説明された。教卓にいらしたのはこの先生だけだったが、教室前方の扉のそばに、やけに背の高い青年が柔和にほほ笑みながらごく控えめに立っているのに気づいた。そのイメージは、俳優の松田優作……と聞いて言い過ぎなら、古尾谷雅人の姿をとって思い浮かんでくる。あまりに若々しくまた遠慮がちな様子だったことから、私は当初、鞆持ちの助手さんなのだろうと思っていたのだが、その青年こそが助教授就任3年目の若かりし中地先生だったわけである。この光景が今でも強く印象に残っているのは、当時の控えめな佇まいが、後に重責を担われるようになってからもまったく変わっていないように思われるためだ。どこに身を置いても、自らの存在を当然として振る舞うことなく、場違いかと案じてでもいるかのようなご様子は、国際学会などで明らかに先生ご自身が中心人物のひとりである場合でも同じなのである。後に先生は、自らが愛着をもって取り組んでこられた2人の作家、ランボーとル・クレジオについて、彼らがともに周縁の出身であり、パリやフランスに居心地の悪さを感じていたとしばしば指摘されているが、彼らの抱いていた「ところを得ぬ」感覚と中地先生の漂わせる風情には、どこか通じるものがあるようにすら思う。

この入門講義では聴衆の1人であった私が、中地先生に親しく接していただくことになるのは、同年後期に教養学部教養学科フランス分科に進学してからである。当時、教養学部フランス語部会の先生方は学部後期課程向けの授業を各学期ひとコマずつ提供しておられた。私が進学した学期に中地先生が担当されたのは仏作文の授業である。和文仏訳ではなく、フランス語の課題文を読んだ上で、所定の、ないし自ら設定した問題についてレポート用紙2、3枚分の小論を書くというものだ。先生は用紙の左側を5センチほど空けておくよう指示され、そこに毎回びしりと赤字の添削を施してくださった。参加学生数は10名以上であったから、毎週大変な労力だったはずである。今でも覚えているのは、ユルスナールの一節を題材にした回のこと、これほど見事なフランス語を書ける彼女に自分は嫉妬を感じる、と中地先生が仰ったことだ。当時の私にとって、フランス語といえば辞書を片手に「解説」する対象であり、作文のまねごとをするにしても、どうにか意味を伝えることで手一杯で、文体への配慮などまるで念頭になかったから、先生の高い志に大いに感じ入り、それ以後はフランス語の読み方も少し変わった気さえしている。

この作文の授業は、「文学」やら「解釈」やらの、ひりひりする深遠な営みが前面に出ていなかったこともあり、和やかな雰囲気のにじつに楽しい時間だった。もちろん、2、3年生の表現力はまだまだおぼつかなく、返却される作文は毎回真っ赤に添削されていたのだが、そんななか、レベル違いのフランス語を書いてみせては他の学生を圧倒する参加者がまじっていた。意気阻喪する私たちに対し、この学生は帰国子女なのだから競い合おうと思わなくてよいのだ、と先生は慰め励ましてくださるのだった。そんなこともあって、お目にかかったばかりの頃、私が抱いていた中地先生の印象は、切れ者の学者というより、学生の気持ちに寄り添ってくださる優しい先生というものであった。しかし、それは察しの悪い学生による早合点だったのであって、私よりはるかに鋭い友人は、最初の数回を受講し終えた時点で、あの先生は恐ろしく頭のいい方だよ、としみじみつぶやいていたのを覚えている。

その後、中地先生は1992年に教養学部から文学部に移籍され、私は後を追うかのごとく1993年に仏文の大学院に進学した。博士課程で留学に旅立つまでの数年間、学部と修士課程を通じて、先生の本領である文学、とりわけ近代詩を中心に、刺激的かつ緻密な原典読解の手本を示していただいた。ロートレアモン、バルト、ランボー、ラフォルグ、グラックなどのテキストを読みつつ先生からご教示いただいたことは数え切れないが、最大の教えを挙げ

るとするなら、解釈を行う際のバランス感覚ないし節度であったと言える。畢竟するに文学研究とはひとつの解釈の提示である。文献資料や草稿類に基礎を置く実証研究であっても、意義深い成果であるからには、単なる事実の提示に留まらず必ず何らかの解釈を伴っているはずだ。そして、その解釈には無限の幅が許容されているわけではなく、ひとつの読みが提示される際には、なにより論理的な根拠が求められるのは言うまでもない。一方、若い学生にとっては、幅広い解釈が許されていることこそが原典講読の魅力なのではなかろうか。受験科目としての「国語」や「英語」と異なり、目前には解釈の広大な領野が広がっているうえ、高校時代にはその存在すら想像できなかったさまざまな批評的道具も揃っている。さらに、詩のテキストでは言葉数が絞り込まれているだけに隙間を埋める誘惑も増すわけで、覚えたてのツールを駆使して鬼面人を驚かす類いの深読みを提示したくなるのも人情だろう。中地先生の演習においても、私自身を筆頭に、無理筋の読みを得意気に披露する受講者が少なからずいたように思う。学生による突飛な解釈を受け止める先生の態度は、頭ごなしに否定するでも、軽んじて嘲弄するでもなく、その不適切たるゆえんを、論理、常識、そしてなにより「書かれている言葉」を根拠にしつつ丁寧に説明するというものだった。テキストの尊重は東大仏文研究室で受け継がれてきた伝統的価値観には違いないが、中地先生が専門的に取り組まれてきたランボー研究、それも日本でのある時期までの研究においては、具体的な文言に根拠を置かないまま抽象的・形而上学的議論に耽る「空中戦」の傾向が強かっただけに、先生はなおさら地を這うようにひとつひとつの言葉を吟味する姿勢を貫かれていたのだろう。

クラシック音楽、とりわけピアノ曲が「三度の飯の次ぐらいには好き」（モンサンジョン『リヒテル』「訳者あとがき」）と仰る中地先生、その授業をコンサートに擬えるとすれば、私にとっての忘れられない名演奏は何であろうか。誇張抜きで「感動した」と言い切れるのは、ランボーの散文詩「夜明け」を読んだ演習である。夏の早朝、夜と昼のあいだにある儂いひとときを、少年による女神との一体化の企てとして描くこの詩の美しさについては、もはや贅言を要すまい。だが、美しい詩を扱えば良い授業になるというほど簡単な話でないことは、教師稼業の経験者なら誰でも知っている。そもそも、間然する所なきテキストに余計な分析をほどこした挙げ句、対象に力負けている批評言説など珍しくもないわけで、詩そのものが美しければ美しいほど、それについて何かを述べることで原詩に匹敵する感動を生み出すことは至難の業となろう。私は「夜明け」を駒場の初級文法の時間に教わり、その

みずみずしさにたちまち魅了されていた。その時の素朴な感動は、自分にも親しかった夏の早朝のさわやかさを、言葉によって追体験することに尽きていたように思う。だが、『ランボー全集』の解題やご著書において中地先生が指摘しておられるように、この詩の少年は、目覚めつつ光を増してゆく世界にただ驚嘆しているわけではなく、おとぎ話におけるように、自らの力によって自然に働きかけ世界を目覚めさせているのである。このような見立てを含む解釈を教室で先生から初めてうかがったとき、私は柄にもなく興奮して取り乱した挙げ句、授業後にその感動を直接お伝えした記憶がある。今思い返しても赤面の限りであるが、その時の私は生意気なことに、「自分が感じていながら言葉にできずにいたことをこの授業で明確に表現していただいた」というようなことを申し上げたのだ。もちろん、そんなことがあるはずもなく、「夜明け」から私を受けていた当初の感動は素朴極まりないものであって、先生の提示された明晰かつ繊細な読み方など「感じて」すらいなかったに違いない。にもかかわらず、優れたテキストがときおり感じさせてくれる感慨、自分が言いたかったのはこれなのだ、という思いを先生のお話をうかがいながら私は確かに抱いたのである。こうした勘違いが生じたのも、「夜明け」が初読でも確かな魅力を伝える詩だったからであり、先生の解説も機械装置の複雑な内部を暴くような所業からは程遠かった。中地先生は、作品が投げかけてくる問い、テキストからの挑発を受け止めるにやぶさかではなかったが、単なる謎解きにはいたって冷淡で、初読で受ける感動を大切にしておられたように思う。この点は学生時代から今日まで、私が大いに共感しつつ銘記するところである。

「夜明け」にせよ「大洪水のあと」にせよ、詩の源泉をなしているのは「世界への幼似的な対し方」（『ランボー——精霊と道化のあいだ』）であるし、初期の韻文詩「陶酔の船」においても、船の分身として、さらにはその落胆と疲労の形象化として、子供が印象的な現れ方をする。ランボーにおいて自分が好きなのはアンファンタンな（子供っぽい）ところだ、と中地先生は仰ったことがあった。ボードレールからペレック、ル・クレジオまで、見慣れた世界に新鮮な気持ちで向き合うべく子供の感性が求められたことについては、ここで剩語を並べるには及ぶまい。私書き留めておきたいのは、先生ご自身にもアンファンタンな面が確かにあったということである。研究休暇でフランスに滞在中、海岸のウニを裸足で踏んでしまい、刺さった棘を抜くのに往生したとの思い出話。あるいは、研究科長の重責にあった時分、数段飛ばしで階段を降り肉離れを起こしたという逸話。学生たちにカフェで

お菓子をご馳走しつつ、ケーキにおけるスポンジの重要性を力説されていた姿。こうしたアンファンタンな振る舞いは、これ見よがしに装われたものではなく、ご本人は隠そうとしているのに、ついこぼれ出てしまったふうであっただけに、偉大な学者との距離がぐっと縮まったかのように感じられたものだ。

このように、初読時の感動を大切に、詩の世界観への共感を隠さない中地先生が、研究対象とすっかり同一化してしまっていたと考えるなら、これほど大きな事実誤認はない。前掲のご著書のあとがきに「自分にとってランボーは絶対的な他者だ」と記されているとおりであり、さもなくば、ランボーのような強い磁力を発するテキストについて、あれほどに明晰かつ説得的な論を展開できるはずはないのである。ランボーをランボーの口調で語ったり、デリダをデリダ語で論じたり、といった誘惑は、魅力的なテキストを相手にするほど大きくなるものだが、そこはぐっと踏みとどまり、対象との距離を取らねばならない。授業や論文指導を通じて、中地先生はしばしばそう論されていたように思う。

教育者としての「名演奏」に紙幅を費やしすぎてしまったため、ボードレー、ル・クレジオ、バタイユ、バルト、コンパニオンらに関わる研究・翻訳という、先生の研究者および紹介者としての幅広い活動に言及する余裕がなくなってしまった。もとより、中地先生のお仕事の総体を適確に論評する能力が私にあるわけでもないが、一言だけ述べておきたいことは、これらの業績の背後には、ル・クレジオやコンパニオン本人とのやりとりを始めとして、ギュイヨー、ブリュネル、ステンメッツ、セッピ、ミュラといった一流の研究者との直接的交流が控えているという事実である。ジョゼ・コルティ書店より刊行された博士論文『精神の闘争か、大いなる笑劇か——「地獄の一季節」テキスト分析の試み』を始めとするフランス語による優れた研究成果こそが、こうした華々しい交友関係をもたらしたことは間違いないものの、人との出会いや縁を大切にされる先生のお人柄によるところも大きいことだろう。駒場で英語講読を教わった行方昭夫先生との長い交流、留学中講師を務められた東洋語東洋文明研究所での教え子、ルプテ夫人との家族ぐるみの交際などを拝見するにつけても、中地先生のそうしたお人柄に思い至るのである。人との出会いを大事になさる先生は、もちろん学生たちとの縁も大切に育まれた。授業の合間や研究室行事の酒宴に際して、あるいはご自宅にお招きくださった時、フランス語も学問もないくつろいだ雰囲気、美空ひばりのかすれ声、中田英寿のパス回し、マルシェのメロンの美味、毎朝アサガ

オを見る喜びなど、じつに多彩な話題でもてなして下さったことを思い出す。こうした何気ないおしゃべりの中でつぶやかれた言葉のいくつかは、教室での教え以上に私の心に残り続けている。

2020年6月、先生の数多いご翻訳のひとつ、ル・クレジオ『隔離の島』が文庫化された。天然痘の発生に伴う隔離状態を描く小説が手に取りやすい形で再刊された時、世の中はまさにパンデミックのもと人的交流もままならぬ状況にあり、それは現在に至るまで続いている。私も中地先生に直接お目にかかる機会を持てずにいた折、ご自身が副理事長を務めておられる日仏会館の主催で開催されたのが、コレージュ・ド・フランス名誉教授アントワヌ・コンパニオンとのオンライン対談「合わせて80年をふりかえる——文学の教師として、研究者として」（2021年6月29日）である。日仏におけるフランス文学研究を牽引してきたお二人のやりとり、文学との出会い、教育活動、研究活動をそれぞれ主題とする2つのセッションは、いずれも刺激的で有益な示唆に富んでいたが、私にとって印象的だったのは、教育と研究の関係をめぐる、お二人の捉え方の違いだった。市民に向けて母語で講義していたコンパニオン氏が、教育と研究は等号で結ばれると断言したのに対し、教室で外国語の読みほどこきを省略しえなかった中地先生は、教育と研究は基本的に別個の営為だった、と仰ったのである。今日の大学において「研究を通じての教育」というフンボルト理念が十全には実現しがたいことは、外国文学の教員なら誰しも実感しているところであろう。お二人による認識の相違は、コレージュと大学という設置形態の差以上に、教育・研究に外国語が介在しているか否かの違いに由来しているはずである。外国語そのものの教育もさることながら、外国語を用いた教育もますます困難になりつつある現状において、フランス文学の教育はいかなる姿を取りうるのか。教育と研究はどう関連しうるのか。中地先生に直接お目にかかりお話をうかがえる日が一日も早く訪れることを願うばかりである。